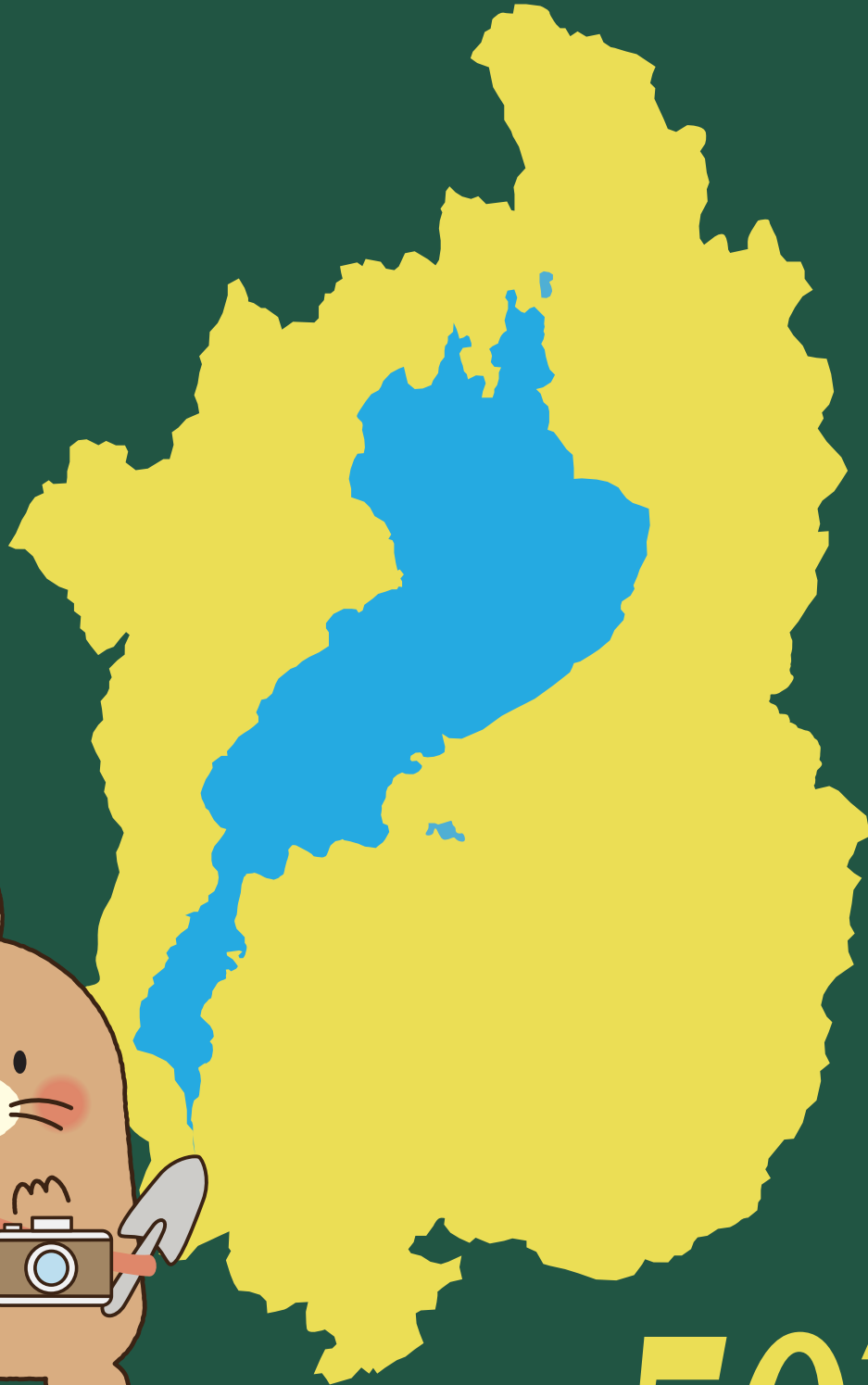


滋賀県埋蔵文化財地域展Ⅳ・協会設立 50 周年記念事業

滋賀をてらした珠玉の逸品たち

—スコップと歩んだ発掘 50 年史—



どきっち



しがぶんちゃん

50th

主催：公益財団法人滋賀県文化財保護協会

後援：滋賀県・甲賀市教育委員会

高島市教育委員会・守山市教育委員会

滋賀をてらした珠玉の逸品たち

—ス Copp と歩んだ発掘 50 年史—

目次 / プロローグ

本書で紹介する逸品の出土遺跡・・・1

1. 縄文時代の逸品・・・2

2. 弥生時代の逸品・・・4

3. 古墳時代の逸品・・・6

4. 古代の逸品・・・8

5. 中世の逸品・・・10

まだまだあるよ魅惑の逸品たち・・・12、13

執筆ほか・・・13

プロローグ

発掘調査の半世紀、50の逸品とともに振り返ります！

わたしたち、公益財団法人滋賀県文化財保護協会は、滋賀県内の発掘調査を主な業務として、昭和45年に誕生しました。それから現在までの約半世紀の間、県内全域で発掘調査を行い、ときには新聞紙上をにぎわせる大発見もありました。

第4回を迎えた滋賀県埋蔵文化財地域展では、1970年から2019年までの50年にわたる発掘調査で出土した遺物の中から、調査員が選び抜いた各年のナンバーワンを展示します。新聞紙上を駆け巡った世紀の発見、そのときの感動をこの機会にぜひご覧ください。それぞれの展示品には、発見された年をともに記載しています。この遺物が発見された年、あなたはどのように過ごしていましたか？滋賀県ではどのような出来事があったのでしょうか？そんな視点からも楽しんでいただければ幸いです。

●本書の見方



近江八幡市
竜ヶ崎 A 遺跡

2003

★4. 縄文土器

【遺物写真】

ぜひホンモノをみて、当時の人の想いを感じてください。

【QRコード】

QRコードを読み取ると、当協会のホームページに掲載された関連記事にアクセスできます。より詳しく知りたい方はこちらへどうぞ。

【発見された場所・遺跡名】

【発見された年】

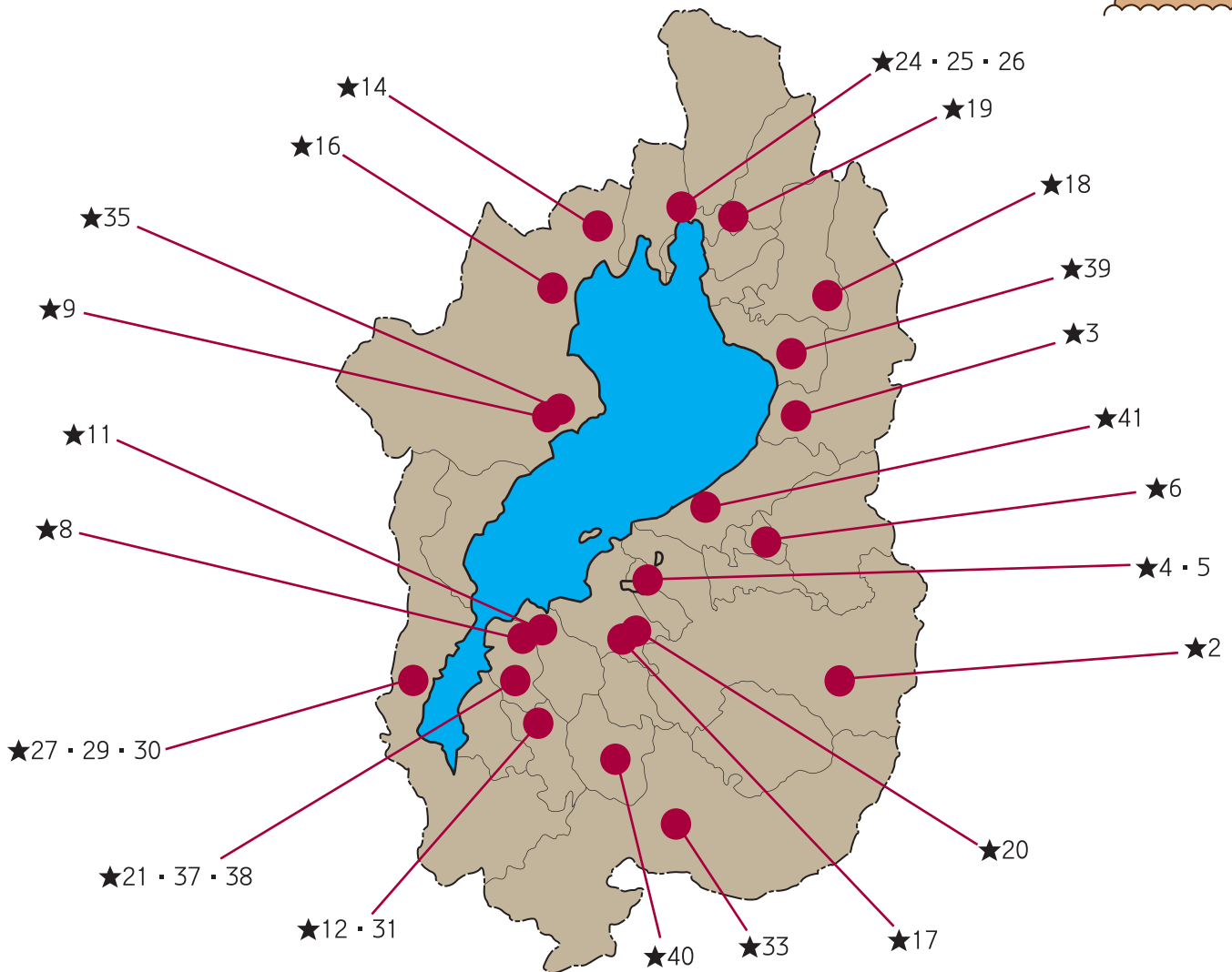
この年はあなたにとってどんな年でしたか？

【★遺物番号・遺物名】

難しい名前もありますが、頑張ってみてくださいね。



一本書で紹介する逸品の出土遺跡



1. 縄文時代の逸品

- ★2 相谷熊原土偶 相谷熊原遺跡 2010年
- ★3 丸木舟 入江内湖遺跡 2002年
- ★4 縄文土器 竜ヶ崎A遺跡 2003年
- ★5 玦状耳飾り 弁天島遺跡 1999年
- ★6 配石遺構 小川原遺跡 1992年

2. 弥生時代の逸品

- ★8 手焙形土器 服部遺跡 1974年～
- ★9 双環柄頭短剣鏝型 上御殿遺跡 2013年
- ★11 木偶 湯ノ部遺跡 1991年
- ★12 小銅鐸 下鉤遺跡 1998年

3. 古墳時代の逸品

- ★14 金銅製単龍環頭大刀 北牧野古墳群 2000年
- ★16 鳥形埴輪 妙見山C-1号墳 1985年
- ★17 人物埴輪 供養塚古墳 1982年
- ★18 獣帯鏡 北山古墳 1996年
- ★19 首飾り 涌出山古墳 1978年
- ★20 把手付椀 上出A遺跡 1997年
- ★21 豎櫛 金森西遺跡 2012年

4. 古代の逸品

- ★24 起請文木札 塩津港遺跡 2006年
- ★25 船板 塩津港遺跡 2015年
- ★26 ミニチュア船 塩津港遺跡 2015年
- ★27 蓮華文方形軒瓦 橙木原遺跡 1977年
- ★29 幅線文縁軒丸瓦 穴太遺跡 1984年
- ★30 複弁蓮華文軒丸瓦 橙木原遺跡 1973年
- ★31 法隆寺式軒瓦 蜂屋遺跡 2018年

5. 中世の逸品

- ★33 魚形水滴 貴生川遺跡 2014年
- ★35 双耳長頸壺 西万木遺跡 2008年
- ★37 白磁碗 横江遺跡 1986年
- ★38 青磁碗 横江遺跡 1986年
- ★39 花瓶と燭台 鴨田・室遺跡 1993年
- ★40 毛抜き 夏見城遺跡 2007年
- ★41 巻数板 賀田山遺跡 2016年

こちらは本書1～5で取り上げた逸品の出土遺跡、出土年です。★は本文中の番号とリンクしています。それ以外の逸品については、12・13ページのQRコードからご確認下さい。

約 15,000 ～ 2,500 年前



1. 縄文時代の逸品たち

じょうもん



2010

★1. 土偶が出土した竪穴住居

東近江市・相谷熊原遺跡

滋賀県の縄文時代とは？

日本列島内にて、土器の利用が始まった約 15,000 年前頃から約 2,500 年前までの間を、縄文時代と言います。この時代に生きた人々の痕跡は全国各地で多数確認されており、漁撈や狩猟、植物採集を中心とした生活を営んでいたことが明らかにされています。県内でも多くの遺跡が確認されており、人々は琵琶湖周辺の自然の恵みを利用してました。彼らの生活を示すものとして、滋賀里遺跡や栗津湖底貝塚などからは、食べて後に廃棄された魚の骨や貝殻、琵琶湖周辺の山野で育った果実の種子や動物の骨とともに、それらを捕獲・加工する道具類が数多く発見されています。



★2. 相谷熊原土偶

土偶の作りをみると、乳房が表現される一方で、頭や四肢の表現は見られません。この形態的特徴は、日本国内で確認されている縄文時代初期の土偶の特徴と一致しています。また、本土偶の特徴として、首から胸部にかけて深さ 2 センチほどの穴が穿たれていることが挙げられます。縄文時代草創期の土偶は、これを含めて 2 遺跡 (3 点) しか確認されておらず、全国的に見ても貴重な発見例と言えます。縄文人たちは、さまざまな想いをこの小さな土偶に込めて、そっと握りしめていたのかもしれない。

国内最古級

親指サイズの相谷熊原土偶

★2 は相谷熊原遺跡 (東近江市) の竪穴住居 (★1) の中から発見された、縄文時代草創期 (約 13,000 年前) 頃の土偶です。この土偶は全長 3.1 センチ、親指サイズのとても小さなもので、やや前傾姿勢で自立します。この

漕ぐ いざ、大湖原へ



米原市
入江内湖遺跡

2002

日本全国では約120艘の丸木舟が出土しており、このうち琵琶湖周辺の遺跡からは30艘発見され、全国2位の出土数を誇ります。★3は入江内湖遺跡から発見されたもので、約5,600年前（縄文時代前期中葉）に利用されていました。ヒノキを石斧で伐採したのち、焼き焦がしながら石器で中身を削り貫いたようです。舟の側面形を滑らかな弧状にすることで、水面での旋回能力を高めた造りとなっています。その反面、前方からの波の影響を強く受けてしまう弱点もありますが、細やかな操舵が可能です。縄文人たちは、この特性を活かし、波の穏やかなヨシ原や河川へ漕ぎ出して、豊かな恵みを手に入っていたようです。



★3. 5号丸木舟出土状況



近江八幡市
竜ヶ崎A遺跡

2003

★4. 縄文土器

飾る わたしたちはアーティスト

★4は竜ヶ崎A遺跡から出土した縄文時代中期末（約4000年前）の深鉢形土器です。土器の主な用途は食べ物を煮炊きすることですが、この土器の上段部は二重構造になっており、透かし穴や粘土紐による渦巻きなど派手な装飾が施され、実用性を超えた芸術性を感じさせます。

★5は瑛状耳飾りと呼ばれる石製の耳飾りで、縄文時代早期後葉～前期前葉（約6000～5500年前）のものです。この遺跡で発見された耳飾りの中には、完全な形のものではなく、欠片の端に穴が穿たれたものも多く見られます。このことを考えると、壊れてしまった大切な耳飾りを紐で縛って修理したり、あるいはペンダントとして身に付けていたのかもしれない。



近江八幡市
弁天島遺跡

1999

★5. 瑛状耳飾り

祈る ねがいよ、かなえ！

甲良町
小川原遺跡

1992



★6は小川原遺跡で確認された縄文時代後期の配石遺構です。配石遺構とは、石を意図的に並べた人間活動の痕跡であり、信仰や祭祀、あるいはお墓に関するものと考えられています。小川原遺跡では、このような配石遺構が住居跡とともに100×70メートル以上の範囲で分布しており、西日本最大級のものであります。並べられた石の中には熱を受けたものもあり、また関東以北で多く発見されるハート形土偶も遺跡内から出土していることから、縄文人の祈りを考える上で注目されます。



★6. 第31号配石遺構 検出状況

約 2,500 ~ 1,700 年前



2. 弥生時代の逸品たち

やよい



1974~

★7. 360基以上の方形周溝墓群

守山市・服部遺跡

滋賀県の弥生時代とは？

滋賀県には、弥生時代を物語るたくさんの遺跡がみつかっています。それは、琵琶湖に注ぐたくさんの河川と、それが育む肥沃な大地があったからにはほかなりません。縄文時代の終わりから始まった稲作は、この時代に本格化していきます。稲作による食糧の安定は、人口の増加を促し、平野部を中心に多くのムラが点在していました。ムラでは豊穰を祈るさまざまな祭祀が行われ、そこで使われたと思われる木偶や銅鐸なども見つかっています。その一方で、未だに用途不明な遺物もあり、弥生時代の不思議を謎解く調査はこれからも続きます。



★8. 手焙形土器（左：正面、右：裏面）

水田は洪水で埋もれてしまいますが、中期（約 2200 年前）になると、ここは墓地として利用され、方形周溝墓と呼ばれるお墓が 360 基以上発見されました（★7）。そして再びこれらが洪水で埋まると、後期（約 1900 年前）には溝で集落を囲った環濠集落と呼ばれるムラが営まれます。そんな溝から出土したのがこの手焙形土器です（★8）。半球状の覆いを持つ少し変わった土器ですが、未だその用途は明らかになっていません。覆い部分の美しい装飾や、墓からの出土例が多いことから、祭祀のために利用されたのかもしれない。

弥生の大遺跡 野洲川河口の服部遺跡

服部遺跡は、野洲川の河川改修工事の中で発見され、特に弥生時代の成果はとて重要なものでした。前期（約 2500 年前）には 20,000 m²以上と想定される水田跡が発見され、この時代の稲作のあり様を伝えてくれます。その後、

日本初

謎の短剣鑄型の発見

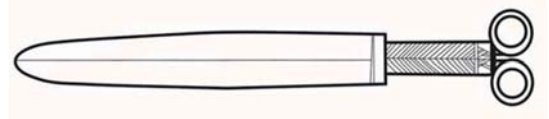
上御殿遺跡（高島市）で出土したこの鑄型（★9）は日本国内で初の発見となりました。弥生時代～古墳時代前期ごろのもので、2枚を重ねたような状態で出土しました。できあがる製品の形状として最も近いものを探すと、中国の春秋戦国時代（紀元前770～221年）における北方地域（河北省北部・北京北部・内蒙古中南部など）のオルドス式銅剣にたどり着きます。ただし、時代も地域も大きく離れていることから、これがなぜ近江のこの地に出土したのか、いまだ謎に包まれています。上御殿遺跡では、大きな河川が見つかっています。その岸边、川に向かって置かれていたことから、川での祭祀に使われていたのかもしれない。



高島市
上御殿遺跡
2013



★9. 双環柄頭短剣鑄型



★10. 復元短剣模式図

祀る

いろいろな祈りのかたち

むかしから、人は神さまにさまざまな願いを奉げてきました。遺跡を発掘すると、そういった祈りの場で用いられた道具が出土することがあります。湯ノ部遺跡（野洲市）で見つかった木偶（★11）もそのひとつです。大中の湖南遺跡（近江八幡市）や烏丸崎遺跡（草津市）などでも出土しており、この時代の人々が、祖先に豊かな実りを祈るために作ったものと考えられています。その祈りのかたちのひとつとして、縄文時代には相谷熊原土偶のような土偶が各地で作られました。

後日 HP に
記事を
UP します！

栗東市
下鉤遺跡
1998



★12. 小銅鐸

しかし、弥生時代に登場する木偶は、不思議なことに全国でも特に滋賀県で出土する傾向が高く、しかも滋賀県のは、顔や身体がしっかりと表現されているという特徴があります。

もうひとつこの時代の祭りの道具として、銅鐸があります。吊り下げて鳴らしていたものが、置いて使うようになり、時代を経るにつれて、大型化していきます。滋賀県は銅鐸の出土数が多く、日本で最も大きな銅鐸は滋賀県の大岩山から出土したものです。その一方で、下鉤遺跡（栗東市）では、日本で最も小さな銅鐸が出土しています（★12）。これは純粹に、小型の銅鐸そのものではなく、銅鐸の模造品である可能性もあります。これもやはり、当時の人々が祭祀のために使ったものなのかもしれません。



★11. 県内出土の木偶

（左から二つは大中の湖南遺跡、一番右は烏丸崎遺跡、それ以外は湯ノ部遺跡から出土したもの）



野洲市
湯ノ部遺跡
1991

3. 古墳時代の逸品たち



2000

★13. 多くの副葬品が出土した2・3号墳

高島市・北牧野古墳群

滋賀県の古墳時代とは？

県内では当時の人々のお墓である古墳や、ムラの跡が各地で見つかっています。この時代、弥生時代以来の農耕社会が発展し、さまざまなレベルの集団が形成されていきますが、こうした各集団のリーダー（首長）を葬ったお墓が古墳です。この時代、前方後円墳をはじめとしてさまざまな形と規模の古墳が日本列島の大半の地域でいっせいに築かれはじめます。つまり、古墳は単なる「お墓」ととどまるのではなく、葬られた首長の社会的位置を形や規模そして内容で示していると考えられます。それゆえ、古墳をとおして当時の社会を垣間見ることができるのです。

美しい副葬品 金ピカが見つかった！

★14・15は北牧野2号墳で出土した環頭大刀です。古墳時代後期後葉頃（約1500年前）の横穴式石室から出土しました。柄の端に金銅製の飾り金具（環頭）が取り付けられています。この金具は、環の中に龍の横顔があし



★14. 金銅製単龍環頭大刀

らわれたもので、環の表面にも二頭の龍が細かな文様で表現されています。鑄ついで緑青に覆われていますが、一部に金メッキが残っていますので、本来は全体が金ピカに輝いていたはずです。こうした大刀は、朝鮮半島で製作・使用されていたものの影響をうけ、古墳時代後期頃から日本でも作られました。その製作はヤマト政権が管理し、列島各地の首長へ配布したと考えられています。北牧野2号墳の被葬者も政権と深いかかわりをもっていたのでしょう。



★15. 大刀全体

ほうむ 葬る

死者へ送る逸品たち

古墳では、墳丘にさまざまな埴輪がめぐらされていたり、棺の中には亡くなった首長とともにさまざまな器物が副葬されたりした例があります。

まず埴輪ときいて思い浮かぶのは人物や動物の埴輪でしょう。★17は人物埴輪で、男性の半身像でほぼ全体の姿をうかがうことができ、顔面には入れ墨を表現してあります。★16は鳥をモデルとした鳥形埴輪です。水鳥とみる意見もあります。大きく跳ね上がった尾羽の形からは鶏とみるのが妥当かもしれません。

古墳の中央部には棺が納められ、そこには亡き首長とともに、さまざまな器物が副葬されました。★18は銅製の獣帯鏡で、中央の突起周辺には朱雀・玄武・青龍・白虎といった神話上の神獣が細かな線で表現されており、中国からの舶来品であるとわかりました。★19は玉の首飾りで、その石材には北陸地方等を産地とするものもあります。となると、北陸地方等の地域で作られた首飾りを、この涌出山古墳の被葬者は何とかして入手したことになると思います。そして生前に着用し、その後もあの世にまで持っていたのでしょうか。そう考えると、彼あるいは彼女にとって、この首飾りはとても大切な品だったように思われてきます。



★16. 鳥形埴輪



高島市
妙見山 C-1 号墳

1985

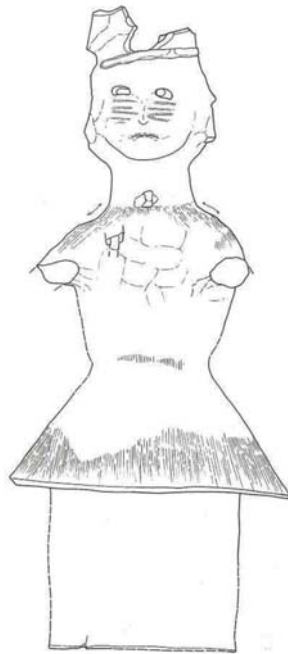


★18. 獣帯鏡

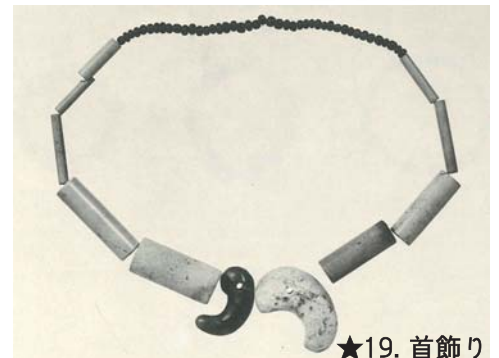


長浜市
北山古墳

1996



★17. 人物埴輪



★19. 首飾り

近江八幡市
供養塚古墳

1982



長浜市
涌出山古墳

1978



いろど 彩る

暮らしのさまざま

この時代、朝鮮半島等からの文化的な波がおよび、列島の社会に大きな変化をもたらしました。なかでも古墳時代中期頃（約1600年前）に、朝鮮半島からあらたに伝わった須恵器と呼ばれる土器は、その後の日本の土器づくりの基礎となりました。★20は須恵器の一種で、把手がつく形は今のコーヒーカップとほとんど変わりません。何を飲んでいたのでしょうか。水？それともお酒？想像が膨らみます。★21は堅櫛で、髪に差して髪留めとして用いたものです。いずれも古墳時代の人々のふるまいやその姿を垣間見せる逸品です。

後日 HP に
記事を
UP します！

近江八幡市
上出 A 遺跡

1997



★20. 把手付椀

後日 HP に
記事を
UP します！

守山市
金森西遺跡

2012



★21. 堅櫛



4. 古代の逸品たち



2006

★22. 平安時代以降、北の玄関口となった塩津港 長浜市・塩津港遺跡

滋賀県の古代とは？

古代近江は、交通の要衝として大きく発展することとなります。奈良時代、律令制下で設定された都と地方を結ぶ古代官道のうち、東海道、東山道、北陸道が近江を通り、道沿いには古代の役所関連の遺跡に加えて、多くの寺院跡なども見つかると、多様な瓦の出土が見られます。さらには琵琶湖岸の各所には港が設置され、湖上交通も大いに賑わいます。そのうちのひとつ、滋賀県の北端にある塩津港遺跡は、当時の港のあり方をリアルに伝えてくれる全国でも屈指の遺跡であり、北陸と京を結ぶ中継地として、大いに賑わう様子が想い起されます。

日本初の発見 神さまとの誓いの木札

琵琶湖の北端、大川の河口にはかつて塩津港がありました。北陸から陸路を経て塩津に運ばれ、ここから大津、京へと荷物が運ばれたのです。発掘調査により、港の遺構と神社遺構が見つかりました。ともに最盛期は11世紀後半か



★23. 起請文木札出土状況

ら12世紀後半と考えられます。神社遺構として本殿・拜殿・鳥居が見つかり、境内を囲む堀から「起請文木札」(★23・24)が出土しました。これは全国的にも出土例がなく、合計400点以上が見つかりました。起請文とは、神さまとの約束事のようなものです。木札を納めた人物には運送業者が見られました。つまり、神社と港には深い関わりがあったことが想像されます。

そんな木札の一節にこんな言葉が記されています。「もし預かった荷物を失ったならば、神さまの罰を、身体にある八万四千の毛穴からお受けします。」



★24. 起請文木札

にぎわ

賑う



長浜市
塩津遺跡

2015



★25. 橋に転用された船板



★26. ミニチュア船出土状況

琵琶湖、北の玄関口

塩津港遺跡では、港の遺構も見つかっています。11世紀後半から12世紀後半に最盛期をむかえ、13世紀以降に衰退していきました。この遺跡の成果は、これまでよくわかっていなかった平安時代の港の様子を明らかにしてくれました。

港の埠頭は埋立てによって築かれ、その上に多くの建物が建てられていました。埋立て土の中には多量のゴミが含まれており、土器や木器、金属器など、中には当時の一般的な集落には見られない、あたかも京の都を彷彿とさせるような遺物も出土しています。これらの遺物は、まさに塩津港の賑わいをリアルに伝えてくれます。

また、道路遺構も見つかっており、道路から埠頭へは板材の橋をかけて渡ったようです。この板材(★25)は、観察の結果、船板を再利用したものとわかりました。約11cmの分厚さをもち、板を連結するための船釘用の孔も見られます。この板材の規模から見て、全長17mほどの大きさの船だった可能性があります。

葺く



大津市
榎木原遺跡

1977

近江を彩る瓦たち

近江では、かつて都が置かれた大和国に次ぐほどに、多くの古代寺院が建立されました。667年大津宮遷都に伴って崇福寺などの寺院が建立され、そのために長尾瓦窯や榎木原遺跡(★28)などの瓦窯で瓦が焼かれ、そこでは近江ならではのさまざまな文様が施された製品が作られました。榎木原遺跡で出土した蓮華文方形軒瓦(★27)は、両面が方形を成し、横からみたハスの花をモチーフにしたサソリのような文様で飾られています。穴太遺跡から出土した輻線文縁軒丸瓦(★29)は滋賀県内での出土例が多く、渡来系氏族との関連がうかがわれています。また他地域との交流に関わる瓦もあります。蜂屋遺跡から出土した瓦の中に、法隆寺式軒瓦(★31)が見られました。これは近江に法隆寺の領地があったことに関わるものです。このように近江では、都に近いという立地から、その地域に影響を受けた特徴的な瓦も使われ、寺を彩っていたのです。



★27. 蓮華文方形軒瓦



★28. 瓦窯(榎木原遺跡)



★29. 輻線文縁軒丸瓦

大津市
穴太遺跡

1984



★30. 複弁蓮華文軒丸瓦

大津市
榎木原遺跡

1973

後日 HP に
記事を
UP します!



★31. 法隆寺式軒瓦

栗東市
蜂屋遺跡

2018





5. 中世の逸品たち

ちゅう せい



★32. よみがえる戦国の城

甲賀市・貴生川遺跡

2014

滋賀県の中世とは？

滋賀県では、これまでに行われた滋賀県中世城郭分布調査によって、1,000 を越す中世城館が確認されており、その数は全国でも屈指の多さを誇ります。中には発掘調査により、往時の姿を垣間見れる城館跡もあります。ここで紹介する貴生川遺跡、夏見城遺跡は、発見された遺構・遺物を含めて大きな成果が上がっています。またこの時代、庶民たちも大活躍します。多くの争いの舞台となったここ近江で、ときに戦い、ときに訴訟を起こしつつも、地縁のつながりを大事にしながら、みなで団結して自分たちの村を護っていったのです。



★33. 魚形水滴



★34. 魚形水滴が出土した井戸

ができました(★32)。館を囲む堀が、半町(約50m)四方の規模で発見されました。その内部で見つかった井戸のひとつ(★34)から、魚形の陶器(★33)が出土したのです。長さ約8cm、幅約3.5cmの小さなもので、背びれの脇と口には小さな孔が空いています。このことから、墨を磨る際に必要な水を入れるための水滴であると考えられます。中近世の遺跡を調査すると、さまざまな生き物をモデルにした水滴が出土します。この魚も、この城館に住んだ人の暮らしを彩るアイテムだったのでしょ。

「井」の中の魚 戦国の城館跡から

甲賀市域では、全部で180を越える城館が確認されていますが、その正確な年代や規模等が明らかにされているものはほとんどありません。そんな中、この貴生川遺跡では16世紀後半の城館跡が、全体の3/5の規模で把握すること

美と技

暮らしを彩る

中世の人々は、さまざまな美品を入手していました。国内のみでなく、時には中国からの輸入品を手にして、暮らしを美しく彩っていたのでしょう。西万木遺跡から出土した室町時代の双耳長頸壺(★35・36)や、横江遺跡から出土した平安時代から鎌倉時代の白磁碗(★37)・青磁碗(★38)なども、土地の有力者が中国から入手した品々です。特に双耳長頸壺は、中国の宋・明代に古代の銅器を模倣してつくられたもので、耳の部分が龍が口を開け、舌をのばしたように見えることから、「龍耳瓶」とも呼ばれています。夏見城遺跡では、城に伴う溝から室町時代の毛抜き(★40)が出土し、指を当てる面には、美しい鶴と沢瀉が彫金されており、所有者の美へのこだわりが想像されます。



★36. 双耳長頸壺出土状況



高島市
西万木遺跡

2008

★35. 双耳長頸壺



★37. 白磁碗



★38. 青磁碗

守山市
横江遺跡

1986



★39. 花瓶と燭台

長浜市
鴨田・室遺跡

1993



★40. 毛抜き

湖南省
夏見城遺跡

2007



祓

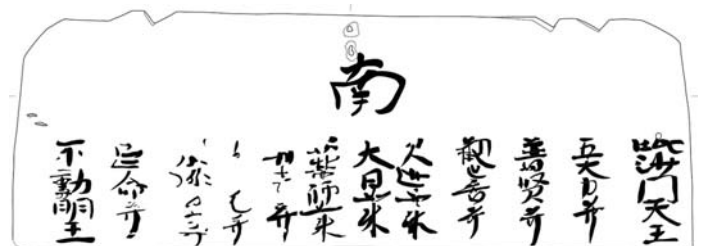
厄災を祓うまじない板

賀田山遺跡では、鎌倉時代の小さな集落が見つかりました。その集落から、絵馬のような形をした一枚の木札が出土しました。これは巻数板(★41)といい、外からやってくる厄災から身を護るため、お正月に屋敷や集落の境界に吊り下げて使われたものです。中世の巻数板は全国でも数えるほどしか見つかっておらず、滋賀県では2例目となります。この風習は、滋賀県など全国でも一部の地域では現代でも色濃く残っており、中世の人々の想いが今なお伝えられているのです。



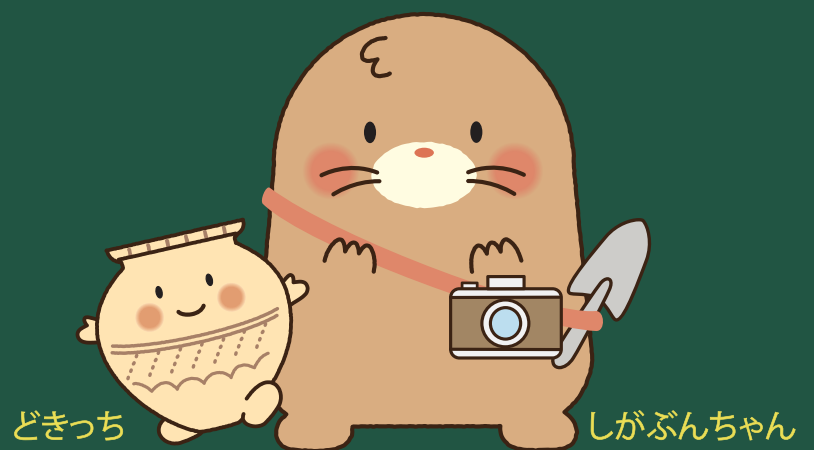
彦根市
賀田山遺跡

2016



★41. 巻数板 写真(上)・実測図(下)

あなたが自慢したくなるような
逸品は、見つかりましたか？



どきっち

しがぶんちゃん